

ラムサール COP10 報告

(はじめに)

25日から30日にかけて、韓国へラムサールCOP10(ラムサール条約第10回締結国会議)に行ってきました。

ラムサール条約とは、湿地が水質を浄化し、多様な動植物の住処となっているなど、人類の生存にとって重要な位置を占めていることから、世界の重要な湿地を保全することを目的とした条約で、イランの著名な湿地ラムサールにちなんでその名が付けられています。

そして、3年に一度締結国会議が開かれ、保全すべき重要な湿地を指定し、また湿地の保全に関する決議を採択しています。第1回会議は1981年にイタリアで、前回(第9回)会議はアフリカのウガンダでそれぞれ開かれ、日本でも第5回会議が釧路で開かれました。

日弁連の公害環境委員会においても湿地PTを設け、長崎の諫早干潟をはじめとして沖縄の泡瀬干潟、わが敦賀市の中池見湿地など、湿地保全に向けた活動を行ってきました。

25日は朝8時に福井駅を出発し、11時10分に関空到着、12時50分に関空を出発し、14時20分にプサンの金海(キメ)空港に到着。16時に空港をバスで出発し、18時30分にNGO会議が行われた順天(スンチョン)市に到着しました。

26日

(NGO会議 - あらまし)

26日と27日はNGO会議です。NGO会議は、各国代表が集まった本会議が28日から始まることから、その前に世界のNGOが集結して湿地保全に関する声明を出して、各国政府にNGOの意思を伝えることを目的としています。

なお、本会議会場である昌原(チャンウォン)はプサンから50キロ程度の場所なのに対し、NGO会議の会場である順天(スンチョン)はプサンから200キロあり、むしろ光州(韓国現代史上最大の民主化運動である光州事件の舞台となった都市)に近いことから、当初はなぜそのように離れたところで、と思ったのですが、どうやらスンチョンは韓国で最も著名な湿地があるところのようで、確かにNGO会議の場としてふさわしいと思いました。

ちなみに、NGO会議には遠く中南米やアフリカからもNGOが来ていましたが、会議に出席した人で最も多かったのは日本人で、全体の半分くらいを占めていました。おそらく韓国の環境NGOは会議の裏方で忙しかったのではないかと想像されますが、いずれにせよ日韓両国の近さを改めて感じました。

(NGO会議第1部)

9時から開会です。

まずCOP10韓国NGOネットワーク共同代表による開会宣言が行われ、韓国環境連合の代表や市長の挨拶があり、ラムサール会議におけるNGOの役割や韓国の湿地の現状に関する基調講演が行われました。

そして10時半からNGO会議の第1部です。

ここでは東アジアで開かれる会議ということで、「水田の生物多様性の保全と賢明な利用」に関する報告が行われました。

米は世界の多くの地域、特に多くの人口を抱えるアジアにおいて重要な主食ですが、水田は生態学的には湿地として考えることができ、生物多様性を保全する上でも重要な役割を担っています。

また、かつては農家にとって水鳥は水田を荒らすというマイナスイメージで捉えられていましたが、近年では宮城県や兵庫県豊岡地方のように、水鳥がいるところで生産された米は安全性のシンボルとして、「ラムサール米」「コウノトリの米」といったブランド価値を付けることにも役立って来ています。

スペインの Ignasi Ripoll 氏も、イプロ川のデルタ地帯における稲作において（代表的米料理のパエリアに見られるように、スペイン人も結構お米を食べます）日本のふゆみずたんぼ（冬季、田に水を入れたままにしておくことで、様々な有機物が田に培養され、生物多様性が維持される）を導入することで生物多様性はもとより、減農薬・減化学肥料によって米の商品価値も上がったと説明されました。

この他、日本野鳥の会からは日韓共同で韓国・九州・四国の水田におけるツルの繁殖地を設営しつつある様子、農業者の稲葉さんからは日中韓の農業者による有機農法の連携、韓国生協からは農業者と消費者が連携して新しい農法 - 従来は増産を狙って高い密度で種をまいていましたが、かえって病気がはびこりがちになることから、最近では密度を抑えてイネを健康にし、多くの生物が共存できるようにしています - を普及しつつある様子が紹介されました。

(NGO 会議第 2 部)

昼食を挟み 2 時から第 2 部「(アジアにおける) 湿地の賢明なそして賢明でない利用」で、まずはアン・ビュンオク氏による韓国の大運河計画の報告です。

韓国の三大河川は、中部の山間地域から北西部の首都・ソウルへ流れる漢江と、やはり中部の山間地域から南東部の韓国第二の都市・プサンへ流れる洛東江、そしてこれまた中部の山間地域から西部にある韓国最大の干潟・セマングムへ流れる金江ですが、この三つを運河で結んでしまおうという恐るべき計画が進められようとしています。

セマングムはもとより、漢江や洛東江沿いにも重要な湿地があり、運河ダムによって川の流量が減ったら生態系にも計り知れない影響があります。そもそも、ソウルからプサンまで海伝いに進んでも、大した不便などありません。かくて、韓国国民の約 80% がこの計画に反対しています。

続いて韓国在住の Danny Rogers 氏からは、そのセマングム（諫早湾の数倍の面積を持つ干潟で、日本では「韓国版諫早」として知られています）の干拓事業によってセマングムに飛来した渡り鳥の 80% が死亡した状況、日本の菅波氏からは諫早湾干拓による漁民や生態系への被害が報告されました。

また第 2 部では、バングラデシュから先進国の消費者のため外国企業がベンガル湾岸のマングローブをエビの養殖池にして、その結果湿地が荒廃してしまった様子の報告があり、ビルマからはビルマの天然ガスを中国・昆明市（雲南省）まで結ぶパイプラインを建設する際に軍事政権がレイプ・強制的土地収用・野生動物の殺害といった蛮行を行ったことが報告されました。

しかし、土地収用はともかく、レイプや野生動物の殺害までする理由が分からなかったのなぜ軍事政権はそのような行為をするのか質問したところ、「ビルマには多くの民族がいて、（政権にとって）天然資源開発の障壁となっている（ため、少数民族の反対運動を抑圧しようとする）このような拳に及んでいる。なお、こうしたインフラ整備は他の国の資金で行われ、それがビルマの人々を分断しているため、韓国（や日本）など先進国にはビルマ政府への投資をやめて欲しい」とのことで、後で日弁連の先輩方が上記回答を補足して「ビルマは軍事政権だから特に露骨にやってくるが、開発に反対する人々への嫌がらせはビルマに限ったことではない。」と説明して下さいました。

(NGO 会議第 3 部)

コーヒーブレイクを挟んで 4 時半から第 3 部「(アジア以外における) 湿地の賢明なそして賢明でない利用」です。

コスタリカの Marin Cabrera さんからは、コスタリカにおいて 2003 年から 2005 年にかけて、湿地に関する

参加型プロジェクトの成功事例を集めて分析したところ、湿地保護と貧困削減には相関関係があったという報告がされました。

続いて、前回開催国のウガンダからは、COP9を機に湿地保全の重要性が広く認識されたという報告と共に、農薬の使用に注意するなど自然保護に関連したトレーニングの機会を作ることにより、地域の貧困の削減を図っているという報告がされました。

前世紀においては、環境と経済とは「どちらを選択するか」という形で語られがちでしたが、今日においては、環境が破壊されたら経済活動の基盤が破壊されることは自明の理であり、貧困削減と環境保護とは密接な関係にあるものといえます。

更に、次回開催国のルーマニアからは、共産主義時代においてドナウ川河口地帯の湿地は埋め立ての対象になりやすかった(ウガンダからも、アミン大統領の独裁時代には環境保護活動が事実上ストップしたと報告がありました)が、資本主義になったら今度は企業による乱開発が進行した、ルーマニアはドナウデルタの存在から生態系保護について良いイメージを持たれているが、ルーマニア市民は国際的プロセスにはあまり参加できておらず、今後の課題であると報告がありました。

国家・官僚による支配にせよ、お金(資本)による支配にせよ、一人ひとりの市民が社会の意思決定に参加できないところでは環境の保全は困難であり、おそらく自然環境以外の保護についても同様のことがいえることでしょう。

なお、本日の最後はわが日弁連・湿地PTの小澤座長による日弁連の取組の説明ですが、弁護士会がいわば組織的に参加しているということにつき、諸外国NGOからは驚きの声が聞かれました。日弁連は世界的にもユニークな活動をして来ただけに、若手としてもこの歴史を発展させていきたいと思えます(^ ^)

27日

(NGO会議第4部)

翌27日も引き続きNGO会議です。

朝9時からの第4部では、NGO会議をラムサール会議における公式代表にすべく議論が行われました。

すなわち、NGOは国際社会において重要な役割を果たしており、その認知は次第に大きくなりつつあるものの、これまでのところNGOはラムサール会議における公式なパートナーと認められていません。そこで、国際NGO委員会を立ち上げて、国際会議に代表を送ることにより、より国際社会の意思決定にNGOが積極的に参加していくことを目指すことにしました。

国際NGO委員会の組織化には、NGO会議に直接出席できないNGOも(例えば、今回のNGO会議に出席した人の半分が日本人であるという事実は、その他の地域の人なかなか韓国まで行けないということの意味します。)インターネットにより意思決定に参加することができる、というメリットもあります。そして、政府の影響の強い「NGO」まで入れるべきかという議論もありましたが、本日をもって国際NGO委員会が立ち上がるという点では合意が成立し、早速運営委員が選出されました。

歴史的な瞬間に立ち会うことができ、心から光栄に思いました。

(NGO会議第5部)

11時からNGO会議第5部で、28日からの本会議に向けた「スンチョン宣言」の採択です。事前に決議案は提示されていましたが、修正意見が相次いだことから、これらの修正を受けて改めて議論が行われました。

主な修正点としては、ネパール代表からの提案を受けた、伝統的なコミュニティや先住民の知恵の尊重、湿地の持続的可能性のためにはその伝統を尊重すべきことが挙げられます。例えば、アイヌ民族が自然と共生する文化を育んできたことはよく知られています。

一方、保全すべき湿地として、韓国のセマングムに加え、日本の諫早などの具体的な湿地名を盛り込むべきかどうか、バイオ燃料の問題も盛り込むか、といった決議の文案をめぐる熱い議論が続き、予定の時間を過ぎても議論が続きました。

政党か否かを問わず、政治を変えることを目指す環境運動は一般に一人ひとりの意見表明を尊重する傾向があり、これはこれまでの政治史を鑑みれば当然のことともいえますが、ただ、市民の社会参加、意見表明の機会と効率的な議事運営は必ずしも矛盾することではない（ml の活用、事前の決議案呈示）ということも、今後検討すべき課題かもしれませんね(^_^)；

(スンチョン湾見学)

昼食後はスンチョン湾へのエクスカージョンです。

スンチョン湾はスンチョン市の南にあり、約 21.6 平方キロメートルの広さを持つ韓国で最も広い干潟の一つです。

様々な川が流れ込み、また潮の干満に応じて海水も逆流することから、淡水と海水が混ざり合う汽水域となり、カニ・ムツゴロウなどの生物が多く生息しています。

タンチョウは 10 月末から毎年 350 羽ほど越冬し、シベリアから極東アジアにやってくるタンチョウのうち、8 割ほどは日本に飛来しますが、残りはほとんどがここスンチョン湾で越冬します。

2006 年 1 月 20 日にラムサール登録され、ここ数年、多くの観光客が訪れるようになっています。

すぐそばにある竜山の展望台から干潟を一望することができます。

七面草が、まるで測ったかのように円形に生えています。いくつも七面草の円が見えます。とても幻想的です。満潮になると七面草は海面下に没し、芦だけが見えるようになるそうです。韓国西部は干満の差が大きく、ここスンチョンでは約 3 m になります。

備考：道中、韓国のトップ女優であるイ・ミヨン氏が撮影に来ていました。スンチョン湾はドラマの舞台としても選ばれているのかもしれないね。

28 日

(本会議設営)

今日からチャンウォン市にて COP10 本会議です。

チャンウォン市は慶尚南道 = 韓国南東部 = の道庁所在地で人口は約 50 万人ですが、西隣にある工業都市・マサン市などとほぼ一体の都市圏を構成しているため実質的には 100 万都市の賈禄があります。

この町は慶尚南道の中心として計画的に作られた町のため、大変整然とした町並みで、会場のチャンウォンコンベンションセンターも海外からの来客を意識した相当モダンな建物でした。

今日の朝はまず、会議場の展示コーナーにて、日弁連としての展示物の設営をしてきました。展示内容は、日弁連の湿地 PT において全国各地の重要な湿地を調査してきたこと、そして調査の成果を踏まえ、日弁連として湿地保全法の制定を提案したこと及び法案の概要です。

幸い宮城弁護士会の公害環境委員長が在日コリアンの先生のため、ご協力を頂いて法案概要の韓国語訳も作成したところ、会場からはかなりの好評を頂きました。

(洛東江河口視察)

本会議のオープニングは夕方でありかなり時間があるため、それまでの間、プサンまで足を運んで洛東江の河口に行ってきました。

洛東江は全長 500 キロを超える韓国では最も長い川で(朝鮮半島全体では中朝国境を流れる鴨緑江が最も長い)、その河口は人口 350 万を超える大都市・プサンに隣接しているにも関わらず、多様な生態系を抱

えていることで知られています。

洛東江の東岸から西を見ると、鳥たちの姿や夥しい砂州を見ることができます。遠くには対馬も望めます。

しかし、プサンに隣接していることから開発の動きが続き、河口に堰が作られるなど自然に改変が加えられてしまったことから、渡り鳥の数は最盛期と比較すると3分の1ほど減ってしまいました。特にトビ類は、エサとなるネズミについて殺鼠剤による駆除が進められてしまったことから、ほとんど見られなくなってしまっています。

更に現在でも、住宅団地、工業団地、金融団地といった開発の動きが後を絶たず、市民による差し止め訴訟も行われているようです。

日韓は最も近い国だと言われていますが、問題点も共通のものを多く抱えています。

一方、洛東江の西岸に来て東を見ると、山沿いに多くの高層マンションが立ち並ぶプサンの町並みが見えます。

そして、近年プサンの市街地は洛東江を越えて西にも進みつつあり、西岸のこちら側も川沿いの干潟を埋め立てて住宅地となってしまいました。

案内してくれた環境保護団体の方によると、「もちろん埋め立て自体良くないことだが、地震国・日本では埋立地での建物建設は地盤沈下を防ぐためしばらく様子を見て地盤を落ち着かせてから行うと聞いている。埋め立ててすぐ建物を建てて、もし地盤沈下の被害が起こったらどうするつもりか」とのこと。

また、川沿いになぜか Y 字型の鉄の棒があったため、何のためか聞いてみたところ、冷戦華やかなりし頃には、北朝鮮のスパイが洛東江から韓国内陸部へ潜入していたことから、韓国兵が様子を監視し、その際に銃を置くため Y 字の棒が設置されたとのこと。

そして南北分断の経緯を考えていくと、日本による植民地支配もその一因と考えられます。

美しい川にこれ以上の悲劇をもたらさないため、日本に協力できることは少なくないでしょう。

(本会議・オープニング)

夕方5時からいよいよ COP10 本会議です。会場には世界各地から1千人ほどの NGO、政府関係者、報道関係者などが集まっています。

オープニングは人気ミュージシャン(たぶん)による Hand in Hand の合唱で、

続いて韓国の環境大臣、慶尚南道の知事、ラムサール条約事務局長(アフリカ人)そして李明博(イ・ミョンバク)大統領の挨拶です。

大統領曰く、「かつて湿地は waste (通訳の英語より。「廃棄物」と訳されることが多いが、この場合は「邪魔者」でしょうか)であったが、今は宝である」とのことです、思わず

今、大統領がセマングムを埋め立てているのは湿地を未だに waste と見ているのではないか、また会場近辺では「環境オリンピック」という文字をよく見かけたが、これで韓国はどのような「競技」を演じるつもりなのか、

と突っ込もうかと思いました。

もちろん、日韓の歴史的経緯もさることながら、日本人がセマングムを解決して欲しいと思うならまず自国の諫早、泡瀬、あるいは中池見を解決することが先決ともいえますし、また仮に上記のことを実際に発言した場合、会場からつまみ出されるのはほぼ確実でしょうが(^_^);、ただ、オーストラリア - 東南アジア - 九州 - 韓国 シベリアは世界でも主要な野鳥の飛行路として一体を成しており、諫早とセマングムは切っても切れない関係にあるといえます。

環境問題に国境はなく、環境保全をめぐる日韓市民の連帯が必要だと改めて感じた次第でした。

(本会議のサイドイベント)

29 日はいよいよ本会議で、もちろんこれが重要であることは言うまでもありませんが、ただ今回の時点ではまだ各国 NGO (含む日弁連) に正式な発言権はなく、また会議に来た諸外国 NGO との連携も負けず劣らず重要であることから、午前中は展示ブースに展示をした国内外の NGO の人たちと話をしました。

日本にいと、アフリカと聞くと貧困というイメージが先立ちがちですが、同時に貧困を克服するための様々な動きもあり、前回開催国のウガンダから来たグループに対しては、小沢秀造・湿地 PT 座長 (3 年前の前回会議にも出席された) が「I love your country」と声をかけておられました。

また、本会議に平行して各国 NGO がサイドイベントを同時に開いていたため、日韓の湿地保全をめぐるシンポジウムにも顔を出してきました。

日本の諫早干拓における生態系破壊、干拓地の農地利用の非合理性(農家はコスト高を恐れて手を出さない)はよく知られていますが、韓国のセマンガムにおいても干拓工事による生態系への影響が生じており、しかも干拓地に作るのはカジノとのことです(当初干拓の名目とされた農地への利用予定は3割程度)!

(ウポ沼)

昼からはチャンウォンから北へ約70キロ、チャンニョン(長寧、なおチャンウォンを感じて表記すると昌原)郡にあるウポ沼へ行って来ました。

ウポ沼は内陸にある湿地としては韓国最大で、約2平方キロの面積があります。植物は168種、鳥類は62種、魚類は28種、昆虫は55種、哺乳類はたぬき等12種、爬虫類は8種、両生類は5種、貝類は5種の生存が確認されています。1998年にラムサール登録されました。

今回のCOP10では、スンチョンと並び、28日からのNGO会議(27日までの議論を受け、NGO会議としての決議内容をきちんとした文章にまとめる)の会場となっていますが、こうした豊かな湿地の存在が会場選定の理由になったものと思われます。

実際、ウポ沼を見ると、ガン、カモ、サギなど様々な鳥の姿がたくさん見ることができました。

もっとも、ウポ沼においても上流や流域から流入するゴミ、生活排水、畜産排水、工場排水も深刻な問題となっています。ただ同様の問題は日本も抱えているところであり、日本人としては、まず自国の環境破壊を止めることがウポ沼の改善につながると信じて頑張りま〜す(^^)

(チュナム貯水池)

ウポ沼から少し戻って、チャンウォン郊外にあるチュナム貯水池も見てきました。

これは日本の植民地時代に農業用水目的で建設された人工池ですが、面積が423ヘクタールと相当の規模があることから、現在では毎年トモエガモが約2万羽飛来するなど、生態系的にも重要な存在となっています。

もっとも人工池の限界か、水質は必ずしも良好でなく、近寄ると若干悪臭が感じられ、またユスリカ(水質悪化の指標といわれる)もかなり現れていました。またチャンウォン・マサン都市圏に位置し、プサンからも遠くないことから、開発圧力も弱くありません。

この池は、どのような状況の下に建設され、また建設される際に何が起こったかを含めて、歴史的経緯に鑑みても、日本人として忘れてはならないものの一つといえるでしょう。